

# 若き技術者を育む技術継承が急務

## 日本技術士会佐賀支部長 宮副一之



平成27年を迎え、素晴らしき年を願う中、今年も、日本を牽引されてきた多くの団塊世代がリタイアされていく。その中でナレッジマネジメント(目的達成のため知を共有、活用を図る知の管理システム)が実行されず、貴重な知が継承なく消えていく。知(形式知・暗黙知)の消滅を食い止め、次世代を担う若き技術者を育むことが喫緊の課題である。また、建設業等の県内発注増の要望の中、この技術継承を果たす体質改善、更なる技術力向上による体力の蓄積・増強(そが必要不可欠な課題である)と考える。以下、私のこれまでの地域活動等を通して得た技術継承に纏わるキーワードを要約列挙する。

### 総合技術監理力

「経済性管理」「人的資源管理」「情報管理」「安全管理」「社会環境管理」を総合的に監理する力である。課題の達成には、潜む問題点を抽出し、その問題点への対策を講じていく。問題点抽出の際、「能力が発揮される。5つの管理は、トレードオフの関係にあることが殆どであり、1つを100点取る、残りの点数は低くなる。つまり「総合力・俯瞰力」が必要となる。この取得には、技術士総合技術監理部門チャレンジが望ましい。私の人生のバイブルの一つである「技術士制度における総合技術監理部門の技術体系」日本技術士会(一)を「読」していただきたい。

### コミュニケーション力

プロジェクトを成し遂げていくためには、協働は不可欠であり、その潤滑材として「コミュニケーション力」は必要不可欠である。プロジェクトが大きくなると、この潤滑材が機能しないと目標に向かつて動き出さないう。コミュニケーション力の取得には、地域活動への参加運営を進



### 交渉力

プロジェクト推進には、推進母体を動かす能力に加え、母体が動く道や周辺環境との調和を図っていく必要がある。当方の考えに聞く耳を持つて頂くためには、繊細な気配りが必要である。前例無き場合には特に、先方担当者の負担軽減が必要であり、担当者の上位と下位にも入念に情報共有を図ることが重要である。欲で動く徳は得られない。納得し交渉の後には、素晴らしき理解者が得られる。

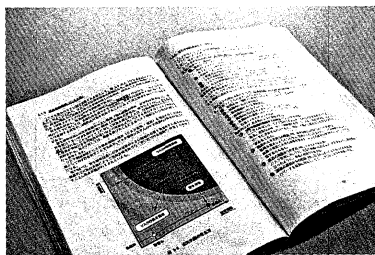
### 完結力

どのような小さな事業でも、完結することが大事である。投げ出さないう、盾となる勇氣・夢実現への継続的情熱、最後は自分でききる活力(体力・ポジティブ感)を持つことが重要である。完結には反省と喜びがあり、次へのシヤ



【略歴】佐賀市上芦町出身。小城市牛津町在住。1954年5月12日生まれ。1978年3月宮崎大学卒業。1978年4月九州技術開発院、1988年4月九州構造設計〜。趣味は卓球。休日の過ごし方は「妻とゆっくり食事」「温泉」「小旅行」「孫と遊び」「ウォーキング」「ジョギング」「水泳」「家系図・自分史作成」「研究論文作成」。

【現役職】日本技術士会佐賀県支部支部長/NPO法人技術交流フォーラム副理事長(初代事務局長)/土木学会木材工学委員会委員/KABSE木材利用研究会委員/木材利用研究会(佐賀)会長/品質確保検討会(佐賀)幹事/深層混合法処理工法検討会幹事/木材活用に関する国際シンポジウム事務局長



### 所属を超えた技術者運動

「佐賀県は草刈り場」との評価からの脱出を目指して設立した「有明塾」、個人活動から協働活動を求め設立された「NPO法人技術交流フォーラム」、県と連名で仕上げた「マニユアル」づくり活動等の「木材利用研究会(佐賀)」、官民協働型の手引き「つくり」を実現した「DMM検討会」、いろいろな先例事例がある。若き技術者で新たな技術者運動を起し、素晴らしき社会実現へ向け貢献していただきたい。

### ●有明塾とは

昭和63年に宮副ら20〜30代の佐賀県内の設計コンサルタント、施工者等で設立した資質向上を目的とした塾。毎月1回の勉強会を開催した。基礎事項を深く追求した。故島内明君、夏秋政則君、宮副一之、福島裕充君、大串正君、盛永保弘君らの技術士を輩出した。現在、メンバー各位は会社の屋台骨として活躍されている。

### ◇◇◇

昭和63年、10年間勤務した九州技術開発院から独立して佐賀県構造設計を設立したのを機に県内の設計コンサルタント、施工者、の屋台骨を今後支えるであろう20〜30代前半の方々に呼びかけ、「有明塾」を創設した。会社訪問をし、塾の説明をして、その趣旨に同感の方々に少しづつ増やしていった。塾では、毎月1回のペースで夜2時間程度の勉強会を実施した。会場は、佐賀市内の安い会議室を確保した。

勉強会では、自由討論とし、各専門分野の方がファシリテーター的な役割を果たした。「地下水と間隙水の違い」「ボックスカルバート内水重の考え方」「ランキン土圧とクローン土圧」「不定流と定流」「不等流と等流」「等方等質」「座屈理論」「衝撃荷重の本質」「固有振動数と共振」「コンクリートの心割れと初期劣化」「技術士受験」「ポルト接合と溶接」「吊り橋」「ポストテンション下拵の手計算」「舗装理論」「推進工法切羽の安定」「掘削力の浮

力」「全応力と有効応力」「沈下の収束」「安全率」「限界状態設計」「有限要素法」……思い出しつても尽きない。あくまでも基礎的なキーワードについて、簡単な言葉で説明できるように理解を深めていくことが目標であった。

その頃、佐賀県の設計業務等においては、県外から、草刈り場、との表現をされており、何とか技術力向上を図り、第三者からも技術力向上の評価を受けなければならぬとの危機感があったように記憶している。

勉強会が終われば、焼き鳥屋で、テーマを掘り下げた議論を交わした。このコミュニケーションが塾生間の絆となつたのは間違いないと思う。この仲間から、「技術士」が誕生していった。故島内明君が最初の合格であった。「現地発生土を活用した、ため池材料の研究」だったと記憶している。合格祝いも皆で行い、〇次会後に繁華街で胴上げしたことはつぎの覚えている。それから夏秋政則君、私、福島裕充君、大串正君、盛永保弘君が続いた。相当前になるが私も合格祝いの時の手作りの横断幕は大事に保管している。

設計者は施工の観点に疎いとの指摘も多かったが、「一般土木施工技術管理士」の勉強会も実施した。施工者からの意見を聞いたりして留意点を抑えていった。今は、飲み会が多くなったが、このメンバーは、会社の屋台骨として活躍されている。今となっては、「有明塾」は、技術者運動の始動の様な感じもしている。